HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第3章　アイヌ差別の諸相
Author(s)	菊地, 千夏
Citation	「調査と社会理論」研究報告書, 38-50
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52414
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_30_3.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第3章　アイヌ差別の諸相 ―民族差別と民族内差別―

菊地　千夏｜北海道大学大学院教育学研究院専門研究員

はじめに

本章ではアイヌの人々の語りの中から「差別」に関する内容に注目する。アイヌ社会では、和人からアイヌへの差別のみならず、アイヌ同士でも差別やいじめがみられることが明らかとなっている（濱田 2012)。これは、民族内の血の濃さにもとづいていたり、アイヌの中でも「朝鮮アイヌ」として朝鮮人との混血がより差別されたりする傾向をさしている。このようにアイヌの多様性が増していく中で、差別もより多様化・複雑化していく可能性は無視できないだろう。しかし他方で、和人との混血が進んだ結果、とくに若い世代に多いのは、まったく差別を受けたことがなかったり、そもそも自分がアイヌの血筋であることすら知らなかったりするというケースである。このような世代が出現しつつある現在、改めて差別問題に注目していくことには戸惑いもあるが、しかしかといって、現代でもアイヌ差別が消滅しているわけではない。

以下では、こうした多様な差別の現状を念頭においたうえで、新ひだか町のアイヌの人々 52人[1)]のインタビューデータを参考に、現代アイヌの差別の諸相を明らかにしていく。その際、道内の別の地域（札幌市・むかわ町）で行った調査（小内編 2012）との比較を視野に入れ、ジェンダーと世代を視点とした分析を行う。加えて以下では、和人によって語られるアイヌ差別の実態も明らかにするために、新ひだか町の住民40人から得られたインタビュー結果も適宜参照していく。つまり、和人からのアイヌ民族差別と、アイヌ社会における民族内差別の両方に注目し、最後に現代のアイヌ差別の特徴に関して考察を行う。

第１節　ライフコース上の被差別体験

まず、これまでの生活の中で、アイヌであることを理由にした差別を受けたことがあるかどうかに関して、全体の50.0%が差別を受けた経験があることがわかる（表３－１・２)。男女別にみると、男性40.0%、女性59.3%が該当し、女性のほうがより被差別経験が多い（表３－１)。さらに世代別を確認すると、被差別経験率は青年層で低く、壮年層・老年層で高くなっている（表３－２)。こうしたことから全体の傾向として、差別を受けた経験は男性の青年層に少なく、女性の壮年層・老年層に多くなるといえるだろう。

表３－１　被差別経験（男女別）

	あり	なし	合計	被差別経験率（%）
男性	10	15	25	40.0
女性	16	11	27	59.3
計	26	26	52	50.0

表３－２　被差別経験（世代別）

		あり	なし	合計	被差別経験率（%）
青年層	20代	0	3	3	0.0
	30代	2	4	6	33.3
壮年層	40代	9	5	14	64.3
	50代	5	5	10	50.0
老年層	60代	6	6	12	50.0
	70代	4	3	7	57.1
計		26	26	52	50.0

第１項　被差別経験に関するアイヌの語り

（１）青年層×男性（計４人中被差別経験者０人＜以下、同様＞）

では世代ごとの被差別に関する語りに注目していこう。

はじめに青年層の男性については、差別を受けたことがある者が皆無という状況である。４人中１人は、最近自分がアイヌであることを知ったために、民族を理由にしたいじめにすらピンと来ないという。また、残りの３人も「周りでいじめはあったが、自分にはそういうのはないし、嫌い」「自分の世代ではアイヌだからいじめというのはない」と語る。学校でのいじめは現代の社会問題の１つとなっているが、さしあたり若い男性にとって「アイヌであること」はいじめの理由になりにくくなっているといえるだろう。

（２）青年層×女性（計５人中２人）

女性の青年層の場合、差別を受けたという割合は５人中２人となる。中学生の時、「アイヌの踊りを踊っていると男の子から冷やかされたので、恥ずかしくて顔を隠して踊っていた」と語る女性は、いじめを受けたという感覚ではないものの、冷やかされたのを機に長らく踊りから遠ざかった。同じく、いじめを受けたと明言しているわけではないが、学生時代に「あ、ドック」(かつての「あ、犬」＝「アイヌ」）という言葉を投げかけられた女性もいる。

また別の女性は、学生時代、アイヌとして外見がわかりやすい者に対するいじめはけっこうあったと語る。しかし本人は「顔がそういうふうに見えないんで、そこが救われていたと思う」という。こうした語りから、ここ10年くらいの間にもとくに学校の中でアイヌであることに対する「からかい」や「冷やかし」等の差別はあったことがわかる。

さらに、実際には差別を受けていなくとも、自分への差別が起きないように努力してきたという女性もいる。彼女は、アイヌ民族であることに劣等感を持っている。自分の場合は見た目ではアイヌとわからない顔立ちだけれども、クラスの中には「ひどいアイヌ（の風貌）の方」もおり、「その子はやっぱり友達はいなかった」、「そういう子は、あまり高校には進学してこなかった」と語る。彼女自身、過去の詳しい事情はわからないもののアイヌは差別されると教えられてきたので、自分の血筋を必死で隠してきた。同じ高校にいた親戚はアイヌ民族に多い姓だったので、堂々と親戚だとは言えなかったという。こうした意識はまだ継続しており、自分の子どもにもアイヌの血筋であることは隠しているという。

以上のように、本人が差別を受けていない場合でも、周囲での差別的な状況に関する語りが目立つ。アイヌである対象者らが自分より血の濃い外見をもったアイヌに対して、民族内の序列を意識

していることがわかる。

加えて、青年層では男性よりも女性のほうに細やかな被差別の語りが多く感じられる。女性のほうがより敏感に、周囲で起きている被差別状況を記憶し、客観的に捉える傾向にあるといえるだろう。

（3）壮年層×男性（計10人中５人）

40～50代になってくると、男女ともに被差別経験率は５～６割に上がってくる。それは学生時代のいじめ・差別だけでなく、恋愛や結婚の際の経験が加わるからといえるかもしれない。

壮年層の男性の中で、恋愛や結婚における被差別を経験した２ケースに注目したい。はじめに恋愛においてアイヌを理由に断られたという50代の男性である。20代の頃に好きになった女性と１年半くらい交際をしたが、突然、「あなたとはもう付き合えません。〇〇〇人だから」というメモをもらった。しばらくして〇の中にアイヌという三文字が入ると気づいたとき、「シャモに対する、怒り心頭がこみ上げてきた」という。その後別の和人と交際しても、結婚の話となると身辺調査が入り、２回ほど駄目になってしまったという。最終的な結婚は30代半ばと遅くなってしまった。

別の40代男性の場合、学生時代から「アイヌ」と「貧困」を理由に馬鹿にされたり、リレーの選手になれなかったり、つらい思いをした。教師も差別に加わっていたと考えている。高校を経て漁師になってからは、差別というほどではないけれども、船内の共同浴場で、毛深いのをからかわれたこともあった。そしてお見合いした際には、相手の実家からアイヌであることと漁師という職業を理由に反対された。最終的には先に子どもを授かったこともあり、漁業組合関係者の地位のある和人に相談して助けてもらった。しかし相手の家からは結婚式に一切アイヌの色を出さないことを求められ、神前の結婚式を行った。この男性の事例から、学校、就労、結婚というライフステージにおいて差別が起きる可能性がうかがえる。

（4）壮年層×女性（計13人中９人）

では被差別経験率がより高くなる壮年層の女性ではどうか。従来から女性に顕著な悩みとして、体毛の濃さの問題が挙げられている（小野寺 2012a；菊地 2012など）。本調査も例外ではなく、たとえば、学生時代の「毛深いよな」という陰口がその後もトラウマになったというケース、和人の夫に「メノコ」(アイヌの女子という意味）と呼ばれ、「お前に似たから子どもも毛深いんだ」と罵られたというケースなど、体毛のことに心を痛めている女性は数多い。また、体毛の濃さはアイヌであることへの認識にも大きく影響し、ある50代女性は、小学校に上がる前から友達と自分を比べ、「肌が違う」と悟っていた。そして成人して出産するときも自分の体毛はより濃くなるし、出産したわが子をみても体毛が濃いためにまた再認識し……というふうに、日常のあらゆる場面で体毛によってアイヌであることを意識させられてしまう。それが他人からの差別に結びつかなくとも、女性たちの心にネガティブなしこりとなっていることはいうまでもない。

このように、男性に比べて女性は見た目の問題によく言及しているという特徴がある。

先述した和人の夫に「メノコ」と呼ばれた女性の父親はアイヌであり、木彫りの仕事をしていた。それゆえ小学校時代に父親が参観日に来ると、木屑まみれで「髭もさもさ」だったので、「お父さんってすごい顔の人だね」とか「お父さんが毛むくじゃらなのはおまえも似てるな」などとなじられ、「泣きながら帰ってきたこともちょくちょくあった」。小学校時代に、「何かつるつるしたきれいな子が

いて、私なんかは髪がぼっさり厚くて、ちょっとまゆげが太くてという、見た目的にきれいだなという系と、ちょっと重いなという系があるなと」気づき、自分をアイヌだと認識した。結婚してから生まれた子どももまた毛深かかったため、夫から「おまえたち２人に脱毛剤かけてやるか」と言われ、泣きながら身内に相談したこともある。現在でも自分の容姿のことを言われると、「心がきしむというか、グッとなることはある」と語る。

さらに青年層の女性にみられたのと同様に、50代の女性にも、差別が起きることを懸念し、アイヌであることを極力隠しているという事例がある。この女性の場合、母親がアイヌであり、昔から差別で苦労してきたという。そのため、「結婚するときはウタリじゃなくて普通の人と結婚しなさい」というのが母の遺言である。社会人になって、一度だけ気を許した相手に打ち明けたとき、急に見下したように馬鹿にした言葉をかけられた。その後は一切、他人の前ではアイヌであることを公言しなくなったという。差別を避けるためにアイヌであることを隠すという生き方は、女性に特徴的なあり方といえる。

（５）老年層×男性（計11人中５人）

最後に老年層の経験を確認したい。被差別経験率は老年層全体では壮年層と変わらず５～６割となっている。しかしその内容に注目すると、まず男性の場合、より壮絶な体験や、現在でも深く心の傷となっているという経験談が目につく。

４歳の時に終戦を迎えたという70代の男性は、当時はいじめがひどく学校に行くことができず、10歳で奉公に出た。和人には「アイヌ、アイヌ」と馬鹿にされ、「スパルタ教育」の教師には理不尽に叩かれたり、バケツを持たされたりした。アイヌの特徴として「奥目である」ことを挙げ、当時は「半分シャモの血が入っていても」「見た目でわかる」ため、「徹底してやられた」という。男性は「１回いじめられたら死ぬまで忘れられない」と語る。

同じように学生時代にひどい差別を受けたという男性も、いつも「天に向かって、何で俺は生まれた」と自問していたと語る。この男性も教師からの差別を挙げ、教室に行っても机がなく、なおさら学校に行かなくなってしまったのは「先生が悪かったと思う」と考える。ただ、１人だけ話のできる教師がおり、その教師は泣きながら話を聞いてくれたり、アイヌの味方をしてくれたりもした。

また別の70代男性は小学校時代と青年期に差別を受けたという。小学生の時、自分は関係のない事件の濡れ衣を着せられ、上級生につままれて職員室に連れて行かれた。教師にはまず「挨拶が悪い」とバチーンと叩かれ、踏んだり蹴ったりの暴力を振るわれた。男性は、「楽しい思い出はない」、「死んでも忘れられないようなつらいこともあった」と述べている。２人の男性から「死ぬまで」あるいは「死んでも」という言葉が出てきているのが印象的である。

以上はどれも70代男性のケースであり、戦後、就学率が安定していない1950年前後の記憶である。和人からの差別ばかりか、教師からの差別もが横行していた時代であることがわかる。しかもどちらかといえば、教師からの差別のほうがつらい経験として強調されている。慕ったり尊敬できたりする教師もいる中で、それとは正反対に体罰を加える教師の存在は、より強烈なエピソードとして記憶に残りやすいのではないだろうか。

（６）老年層×女性（計９人中５人）

次に、老年層の女性の場合、男性のような身体的な暴力の語りは出てこない。ある女性が述べるように「言葉の暴力」が中心といえる。

60代女性は、小さい頃に男の子から「おまえアイヌだべ」といわれ、「何このやろう。『アイヌ』って何よ」というふうにけんかをした。そしてこれをきっかけに親にアイヌとは何かを聞き、自分の民族を認識したという。

同じく、言葉によって「子どもの時はよく馬鹿にされた」と語る70代女性は、「ああ犬来た、ああ犬来た」と言われたことを親に相談すると、「犬は四つ足で歩くけれども、おまえは人間だからちゃんと二本足で歩くべ」と慰められたという。

以上のように、身体的な暴力がないぶん、男性よりも深刻さに欠けるように思えるが、学生時代は「黒人と白人並みに」差別に苦しんだと語る女性もいる。60代の彼女は、いじめがあるので学校には行かず、河原で時間をつぶしていたので、教育をほとんど受けていないという。小１までの間に両親とは死別したため、祖母に育てられた。学校でいじめにあっても相談できる人がおらず、「ほんとに生きてる意味がないっていう感じ」、「両親がいない、じじもいない、誰もいないから恨むわけでもない、自分自身を嘆いただけかな」と回想する。また、学生時代に「楽しかったことは一度もありません」と言い切っている。ただ、比較的教師には恵まれ、いじめられたときにいじめっ子を叱るなどしてくれた。社会に出てからは一切差別がなくなったので、両親からアイヌの血を引いたことを誇りに思い、現在では「血統書付きのアイヌだ」と自負している。そのきっかけとしては、一度北海道を離れ、再度戻ってきたときにシャクシャイン法要祭の様子を見て感激し、アイヌの血筋であることに自信をもったという。

この女性をはじめとして、これまでにみてきた各世代、男女別のエピソードでは学生時代のいじめ・被差別経験が中心となっている。就労以降の差別はないと語る者がどちらかといえば多く、全体を通して、就職の際や職場での被差別エピソードはほとんどうかがえなかった。

加えていえば、これまで被差別エピソードのある者にばかり注目してきたが、被差別経験がないと答える者も一定程度は存在する。その数は青年層ほど多いが、壮年層や老年層に至っても、「自分自身にいじめはなかった」という60代女性や、子どもの頃にけんかは多少したけど、特別な被差別経験はなかったという50代男性、そもそも「学校に行っていないのでいじめはない」と語る60代女性などがいる。

第２項　和人が語るアイヌへの偏見と差別

では和人の語りのなかに、アイヌの人々への差別はどれほどうかがえるだろうか。

和人のインタビューデータは年齢に偏りがあるため、ここでは差別の内容に沿ってみていく。

（１）漠然とした偏見

ややアイヌへの偏見が読み取れる例として、たとえば、60代の和人男性は、「アイヌの人はでたらめ」、「アイヌの人はいいかげん」という考えをもっている。ただその根拠となるのは、酒席でのアイヌの人とのかかわりであり、「酒を飲んだら、だらしない」。「酒飲まないときはおとなしいんだ。喧嘩なんかしない。飲んだら、ふだん我慢しているのかな。だから出るのかな」と語る。そして同時に、「悪い人もいるけど、いい人もいるよ。アイヌの人で」、「アイヌの人って酒飲んだら、だら

しないも（ん）。だらしなくない人もいるけど」というように、一部の酒癖の悪いアイヌへの思いから、アイヌ民族全体への「でたらめ」「いいかげん」という価値観が形成されているように思われる。

このように漠然とした偏見を含む語りは、他にも散見される。仕事でのかかわりから、アイヌと和人の農業経営の仕方に対して、「アイヌの方はどちらかといいますと、知的な部分がやっぱり低いかもしれません」と述べる和人女性、和人は職場での人間関係に気を遣いながら発言するが、「アイヌの人らはあとあとのことまで考えないでウワーっと言う」との見解を示す和人男性など、それぞれの経験に即してアイヌへのイメージが語られる。また、本人はアイヌへの偏見がなくとも、親から、アイヌは「なまけて何もしないとか、お酒飲んでばっかりいるとか、喧嘩すると気が荒い」などと言い聞かされて育ったという和人女性もいる。最後の事例から、やはり和人においても年長世代のほうがアイヌに対してマイナス・イメージをもつ割合が多いのではないかと推定できる。

さらに、差別というほどではないがアイヌへの思いとして、アイヌ民族のみを対象とした金銭的援助等の政策に関して、「それっておかしい」（70代和人女性）と考える者は少なくない。「ウタリ協会からお金を借りて学校へ行ったとか、そういう人がいっぱいいるんですよね。だからね、そういうのがずるいというか、甘えているというか。だから、町の人から優遇されているんじゃないと言われるゆえんなのかも」（50代和人女性）と語られるように、優遇政策があるからこそ、アイヌが怠惰になっていくのではないかという考え方がある。

しかし一方で、以下のようにアイヌの肩をもつ意見もある。

「アイヌ人はずるいとかね、なまけものとかね、そういうことを言う人がいますよね、差別感は持ちたくないけどそうだと。実際につきあってみてそうだと言う人がいますよね。でもそれっていうのは結局、（歴史的に）差別されてきたから裏返しとしてね、そういう行動をとるのかもしれないしね。やっぱり裏切られてきたらね、ずるくもならないと。なまけものっていうのは、仕事だってろくな仕事与えられなかったでしょうからね」（60代和人男性）

明治時代以降、和人から理不尽な民族差別を受けてきたアイヌの歴史をふまえた場合、現在のアイヌのあり方を単純に非難すべきではないという考えである。このように、すべての和人がアイヌへのマイナス・イメージをもっているわけではないものの、全体を通して漠然とした偏見の語りは目につきやすい。

（2）あからさまな結婚差別

こうしたなかで、和人からのアイヌ差別が明確に表れるのは、結婚相手にアイヌの人々を避けたがるという傾向においてである。ある60代の和人男性はアイヌ女性との交際経験をもつという。しかし、「アイヌの人と結婚しようとは思わなかった」。

「結婚だけは。親も結婚はアイヌはやめたほうがいいんじゃないかなといったかもしれないし、いってないかな・・・はっきりしていない。でも俺自体が結婚しようとは思わなかった。知らないでつきあっていたら一緒になったかもしれないけど。見た目でアイヌという感じの人と結婚しようとは間違っても一緒になろうとは思わなかった。友達づきあいはいますよ」

同様に別の50代男性（和人）からは、アイヌの人と日常では交流があり、仲良くもしているが、結婚となると「冗談じゃない」との差別心を持ってしまうことが語られている。

「死んだ親父に『メノコでもいいから再婚するように』といわれた。『メノコでもいいから』、差別的なことだよね。心の中で冗談じゃないよといっていたね。すごい差別しているね。潜在的だな。それは。さっきの設問で仲良くしていましたというけれど、普通に仲いいけど、別に俺のなかでは、アイヌだから差別したり、いじめたりした記憶はないけれど、あったかもしれないけど、わからないけどさ、記憶にないから。潜在的に別な人というのはあったから、だから、親父にそういわれても潜在的に冗談じゃないと心の中で蔑視してると思うんだよね」

以上のように、自分自身がアイヌとの結婚を選ばないというケースは和人男性の側に目立つ。その際、親の代からのアイヌとの結婚を避けてほしいとの思いを引き継いでいることがわかる。

さらに老年層が孫の世代にまでアイヌとの結婚に難色を示すケースもある。70代の和人女性は、子どもは既婚だけれども、もし孫が結婚相手にアイヌの人を連れて来たら、「ちょっと悩むかな」と語る。昔から地域でアイヌの家族を見てきている中で、「顔はやっぱり普通の人（和人）とは違う」との思いがあり、「何代かで」「（身体的特徴が）出てくる」ことを心配している。

このように、アイヌとの結婚を避けようとする和人の側には、身体的特徴の遺伝を憂慮する部分が共通している。混血によって徐々に血が薄まっていくという考えもあるけれども、アイヌと和人の子どもにアイヌの特徴が出てこなくとも、その孫の世代や、何代か後に出てきたりする可能性への懸念がうかがえる。結婚に際しては和人からのアイヌ民族差別が拭いがたく残っているといえる。

第３項　小括

以上、アイヌと和人双方が語る民族差別の状況をみてきた。

アイヌの人々の語りから、ライフコース上で差別が起きやすいのは、学校、就労、結婚のうち学校段階が圧倒的に多いことがわかった。これは本調査では青年層の男性以外に共通しており、近年の調査とも同様の傾向である（野崎 2012；菊地 2012）。その際、被差別エピソードとして語られやすいのは和人からアイヌに対するものが中心となっていた。しかし、青年層の女性にみられたように、クラスメートのアイヌの友人と自分の容姿を比較する語りもあった。これはつまり、アイヌ民族内における偏見といえるだろう。

また、就労の際の被差別経験は少なかったものの、恋愛や結婚の際のエピソードはないわけではなかった。とくに和人の語りに注目したことによって、アイヌと和人の結婚には大きな壁があることが示された。アイヌの人々による結婚の語りは壮年層男性のケースばかりだったので、恋愛や結婚、出産、子育てという各段階におけるアイヌ女性の実態にも目を向ける必要がある。

そして、ここまでの分析では世代ごとの大まかな特徴しか把握できていないため、若い世代になるにしたがって差別がなくなりつつあることに関して、アイヌ差別がどのように変化してきているのかを明らかにする必要がある。

これらをもとに次節では、ジェンダーと世代という２つの枠組みで４つの課題を追求する。

まず第１項にて、アイヌ女性の結婚に対する意識やパートナー選択における考え方に注目する。

第２項では、同じくアイヌ女性のうち子どもをもつケースを取り上げ、母親の視点から見た子どもの世界の被差別状況を確認する。

続いて後半では、世代差に視点を移していく。第３項においては、親世代の現代のアイヌ差別に対する考え方を明らかにする。そして第４項の中で、親から子どもへの血筋の告知に関する語りに注目し、アイヌ自身の差別観を検討する。

こうした分析を通じて最後に第３節において、現代的なアイヌ差別の特徴と変化についての考察を行いたい。

第２節　現代のアイヌ差別とその変化

第１項　結婚と出産をめぐる逡巡

アイヌの人々が恋愛や結婚に慎重になるのは、その身体的な特徴が差別の原因の１つとなるため、パートナーに和人を選択し、血を薄めていくという戦略的意向だといわれている（小内・梅津 2012)。従来の知見と同様に、本調査でも、アイヌ女性が語る結婚や出産時の被差別経験の内容は詳しい。

ある60代の女性は、「絶対アイヌの人とは」「一緒になろうと思わなかった」。「毛深い子どもを生むわけにいかんから、和人の人と結婚した」という。彼女自身もアイヌの血筋だが、子どもの頃に見た唇に入れ墨をしたおばあさんが「恐ろしくて、恐ろしくて」たまらなかったという。さらに自分の手にも濃い毛が生えているのに対して、大嫌いとまではいかないが、何となく、嫌だと思っていた。こうした年少時代からのアイヌに対する偏見が、結婚相手を選ぶ際の基準になっていると考えられる。他にも、「子どもにだけはみじめな思いさせたくないって思って」アイヌとは結婚しなかったという70代女性の事例もある。

アイヌ女性が結婚相手にアイヌ男性を選びたくないというのは、民族内差別として捉えることができよう。ある女性は次のように語る。「結婚するんだったら、見た目ですごい人がいるでしょ。いうたら男の人で毛深さがすごい、もうもうの人とかって、しょっちゅうみるでしょ。それをみると、こういう人と結婚したら子どもかわいそうだよなとか。思ったりしたことはありますね」。こうした語りは客観的にみれば、「加害者の側から語られる民族内差別」（濱田 2012：164）といえるだろう。

一方で、アイヌであることにコンプレックスがあり、和人との恋愛や結婚にむしろ臆病になってしまうこともありうる（菊地 2012)。ここでは、50代の女性のケースに注目したい。

彼女はかつて、「母さんと父さんの子に生まれたから、私こんなにみったくなくて、毛深く生まれた」と親に言ったことがある。申し訳ないことをしてしまったと反省しているし、もし自分の子どもにそういわれたらどうしようという思いもあわせもつ。彼女は和人と結婚する勇気をもっていなかったため、パートナーにはアイヌを選び、子どもは「アイヌとアイヌの子だから、アイヌとして育てるべきだ」と考えた。結婚に際して、かりに和人と結婚した場合、「肌から差別されたり、軽蔑されたりするのは嫌」だし、そもそも和人とは結婚したくないというより自分に自信がもてないために「できない」と語る。

この女性が和人と結婚できなかったのは、パートナーからアイヌ差別を受けたくなかったからである。被差別を憂慮して行動が決まっていくような場合、その差別観はすでにアイヌ自身の中に根づいているものである。このケースでは女性がアイヌである自分自身を卑下してしまうというよう

な意味合いをもつため、「被害者の視点で語られる民族内差別」(濱田 2012：160) といえるだろう[2)]。アイヌ女性の結婚・出産に関する語りには、民族内差別の様相が色濃く表れている。

第２項　子どもの差別と親の憂慮

子どもをもつアイヌの人々の中には、子どもへの差別を憂慮するケースもある。10代の息子がいる30代女性は、本人はいじめや被差別を経験したことはない。だが、息子は年頃になって眉毛を気にしたり、学校で毛深いことをからかわれたりしている。「それを言われると、私が（自分の）お母さんに責めたように責められると、ちょっとね。何とも言えないですね」と語る。彼女は昨年アイヌ協会に登録しようとしたが、「息子にやめてと言われて」、彼女自身も家族も未入会のままだという。10代という若い世代でも、アイヌであることによる「からかい」が生じていることがわかる。

自分の子どもの話ではないが、現在40代の女性は、わが子（20代）の学生時代を回想して以下のように語る。

「子どもの様子みてると、そういうの（被差別）が全然感じられないですよね」、「だけどそういいながらみてても、私の子どもの年代の同じような子たちでも、見た目、わっ、かわいそうだなって女の子もいるんですよ。もうひど過ぎ。わあって。そういう子はやっぱり、ちょっとみんなからあの子嫌って感じで、嫌われてるっていうか、友だち少ないし、その子も大人しいしっていうのがあるし、それをみると私たちの年代でもああいう子はいたなっていうのがあるから、どっか引け目を感じながら生きてる子たちはまだいるような気がしますね」

「さりげなく子どもに『なになにちゃん友だちいるの？』とか聞いたら、『えー、なになにちゃんなんかいないよう』とかっていってたり、『なんか気持ち悪いじゃん』とかって娘もいってたりするから、何がつったら、『見た感じさ、全然女の子っぽくないよね』とかいってたりはしたんで。私も私で、そういわれて、今考えてみると大人気ないと思うんですけども、もっとちょっと良い感じのことといってあげられれば良かったんですけど。私も私でそっかあ、みたいな感じで。押しもしなかったんですよね」

このように最近でも、「見た目でわかる子は損」(同上女性) と言い切られてしまう現実がある。現在、大人世代にはアイヌの血筋であることがわかっても、子ども世代では単に「見た目」の問題として、エスニシティが認識されないままいじめや被差別が起きる可能性も否めない。

第３項　差別の再生産

では現代における差別について、アイヌの人々はどのような見解をもっているだろうか。

２人の男女は、「アイヌ」という言葉自体が差別の温床になっていると考えている。そのうちの１人、50代の男性は、「仕方ない、そういう言葉があるんだから」と諦めつつ、アイヌの言語や文化を残しながらも、日本でのアイヌ民族に関する教育が不十分である現状に憤りを抱いている。もう１人の40代女性も、「『アイヌ』自体が何か差別の言葉のように聞こえちゃって」「あまり好きじゃない」と語る。

「アイヌ」という言葉は協会名の変遷をみてわかるように、「差別語」としての機能を指摘する声も多く、日常の差別の引き金になりうる。第１節で示したように、「あ、犬」という差別語が「あ、ドック」としていまだに使われてもいる。

「アイヌ」という言葉に慎重になるあまり、アイヌの人とはつきあいにくいと考える和人もいる。ある和人の女性は、その場にアイヌの人がいると知らず、「アイヌの人はわからない」という発言をしてしまい、アイヌの人を怒らせてしまったことがあった。「『アイヌ』という言葉を出すとアイヌの人は反発する。自分でいうのはいいけれど、人にいわれるのは抵抗があるようだ」と語る。こうした経験の結果、アイヌの人には「なるべく近寄らない」というふうにもなっていく。

以下のアイヌ女性は、若い世代にアイヌ差別が引き継がれていくことに関して、「年上」の責任だと考えている。

「若い子どもたちが『アイヌ、アイヌ』ってばかにするのは、親がやっぱりそういう姿勢っていうか目線でみてるから、今の子どもたちも何か差別や軽蔑するような言い方で言葉を使ってると思うんですね。だから、何でしょう。年上の指導者というか、これから子どもたちを担っていくような者というかね、そういう人たちがもう少し、何だろう、配慮していってほしいなとは思いますよね。

別にアイヌだからって、別に悪いことしたわけではなくね、ごく普通にみんなと変わらない人間、民族なので、何というのでしょうね、偏見や差別っぽいのがちょっと、だんだんだんだんなくなっていけばいいなとは思いますよね。誰だって、男の子も女の子もそうですけど、好きこのんで毛深く生まれてきたわけではないのでね、身体的な中傷をされるのはちょっと心外かなって思いますね」

たしかに、年長者から下の世代に伝わっていく限り、アイヌ差別はなくならないだろう。差別的な意味合いをもつ言葉の伝達ばかりでなく、アイヌの人々への態度、価値観なども同時に引き継がれ、再生産されていく。その際、大きな影響力をもつのは親としての立場だろう。

６人の子どもをもつアイヌ男性は、子どもがパートナーを選ぶ際にアイヌであるか否かを気にするような家庭に対して、次のような考えを示す。

「やっぱそういうのもいるけど、同級生とかの、こっちの子どもの同級生の親にもいるけど、親がそうなら子どもも考え一緒ですもん。ってことは、そういうとことはつきあいしないっすからね。子どもも」「自然と子どもたちもわかってくるからっすね」。「あすこ（あそこ）の親がこんなこといってたんだよっていうことが耳に入って来たら、子どもも同じようなんだねってことになって。そっからあわないっす」

アイヌを差別する気持ちをもつ親の子どもは同じく差別するので、その家庭とはつきあわないという。一般的にもこうした傾向が強いのであれば、アイヌへの差別は現代でも解消されないまま、互いに歩み寄ることもなしに残存していくことになるだろう。

以上のことから、現代のアイヌ差別は民族内外において、親から子を基本とした、上の世代から

下の世代への再生産という形で今もなお残っているといえる。

第４項　血筋の告知と親子関係

しかし民族内において、アイヌである親が自分の子どもに血筋を伝えるか否かという文脈では、わが子のアイデンティティの構築もさることながら、差別をこうむらないかどうかが懸念される（小野寺 2012b）。そこには、親としてのできる限りの配慮がある。

ある40代男性は、小学校から中学校にかけて、和人から毛深いことを指摘されるいじめを受け続けた。「親に相談しても、親がシュンとしちゃう」、「『ごめんな』しかいわないですもん」と当時の親とのやり取りを回想する。それが現在では、同じく体毛の濃さで悩む息子や娘と同じやり取りをしているという。「娘に『ほんとに何でこんななってるの？』っていわれたら、『ごめんなあ』って謝るしかない」。「申し訳ないなあ」という思いを抱えつつ、「でもやっぱり、変えられないから。あとは強くなってくれっていうしかない」と語る。息子に、「パパも同じことやってきたよ」と伝えることで、息子もわかってくれているようだという。わが子に対する血筋の告知は、改めて機会をもつというより、こうした会話を通じてなされていくことが多いのではないだろうか。

別の40代男性の場合、学校・就労・結婚のどの場面でもこれといって差別される経験はなかった。しかし、わが子への血筋の告白となると、「避けている」、「自分の方から子どもに伝えるというのは、今でも難しい」と話す。彼の場合、これまでに子どものほうから一、二度、「アイヌって何？」「うちはアイヌなの？」と聞かれ、短い言葉で答えた経験はあるという。ただし、「お前はアイヌの子だとはやっぱりいっていない」。「うちは」を強調して「うちはこういう血だよ」と答え、「お前は、とは出てこない」と語る。

この事例から、子どもへの血筋の告知をめぐる親の迷いや心労が浮かび上がってくる。親の側にためらいがあるのは、親個人が差別を受けたことがなくとも、従来のアイヌ差別の歴史を意識しているからに他ならないだろう。「アイヌ」を認知させることは、子ども自身が自らを差別する可能性を生むことになるのである。

第３節　まとめと考察

これまでの検討を通して、民族内外の差別構造が明らかとなってきた。

第１節ではライフコース上にみられるアイヌの被差別経験と、和人からのアイヌ差別に注目した。まずアイヌの語りから、民族外からの差別は、年長世代によって昔の記憶として語られることが圧倒的に多いことがわかった。学卒後に起きる就労や結婚時の差別があまり把握できなかったのも、時代を経るにしたがってアイヌ民族に対する差別が少なくなってきているからなのだろう。その理由としては、和人との混血が進み、アイヌであることを判断しにくくなっていることや、道内でもアイヌ差別の歴史を知らない和人が増えていることが考えられる。

しかし和人の語りに注目した結果、アイヌとの結婚を避けたがる傾向を読み取ることができた。アイヌの側にとっては和人との結婚が血を薄めるための戦略であっても、それに抵抗を示す和人からの民族差別はたしかに存在している。ただその際、和人に特徴的なのは、アイヌの人との日常的な交流や、男女交際すらも問題視はしないが、結婚となるととたんに否定的になるということである。民族差別は日常では影をひそめており、結婚の場面になると顕在化しやすいといえる。

翻って、第２節においてアイヌの人々の差別観に注目していくと、民族内差別と捉えられる語りが少なくなかった。具体的には結婚相手の選択において、アイヌではなく和人を選びたいと考えるアイヌ女性が多くみられた。他にもアイヌ女性の語りの中には、アイヌの友人やよその子どもの外見について、民族内差異を意識する様子もうかがえた。

こうしたことから、現代アイヌを取り巻く差別のあり方は、民族内差別より民族差別のほうが相対的に弱くなりつつあるとの仮説が成り立つかもしれない。たしかに、結婚となるとアイヌ差別が顕在化するという状況は、和人社会にもアイヌ差別が解消しがたく残っていることを意味している。しかし、それが年長世代を中心としていることをふまえると、アイヌ民族について無知で、語る言語をもたない和人からの差別は消失していき、アイヌについて知識があり、語ることのできる者たちがアイヌ社会の内側で互いに偏見をもったり、自分を卑下し続けたりする状況が際立っていくと考えられる。ただし、この仮説については、現代を生きる和人の差別観をもう少し体系化したうえで、改めて吟味していく必要があるだろう。

さらに、民族内差別について注意すべき点は、差別観を構成する価値観や態度が、アイヌの家庭の中でうかつに再生産されていっているわけではないということである。親が子どもにアイヌの血筋を告知する場面では、充分すぎるほどの配慮をうかがうこともできた。親がわが子に差別を受けてほしくないと願ったり、血筋を知ってショックを受けてほしくないと思ったりするのは当然のことだろう。しかしだからといって、自分たち家族だけを守り、よそのアイヌの子については知らないとか、アイヌ民族自体がこれからも差別される対象になることについて無頓着であるはずもないだろう。今後の課題として、アイヌの人々が無意識に語るアイヌについての考え方や価値観をどこまで差別の温床として考えるかを再定義していく必要がある。

注

１）アイヌとしてインタビューに応じてくれた対象者のうち、本人が和人である（和人かもしれない）という５ケースを除いた。

２）ただし、「被害者の視点で語られる民族内差別」としてよりわかりやすいのは、たとえば若い世代のアイヌの人が、同じアイヌでも年上の世代のアイヌは酒癖が悪く、アルコール中毒者や無職の人が多かったといって非難するような場合であろう。本調査では、こうしたアイヌの人が「アイヌ民族」に対して偏見をもつような語りはうかがえなかった。

参考文献

濱田国佑, 2012,「アイヌ社会における差別の問題――生活史から見る民族内差別」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その２　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター，157-68.

菊地千夏, 2012,「アイヌの人々への差別の諸相――生活史に刻まれた差別の実態」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その２　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター，143-56.

野崎剛毅, 2012,「階層形成過程と階層分化の要因――階層形成過程としての生活史」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その２　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 95-108.

小内透編著, 2012,『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その２　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター.

小内透・梅津里奈, 2012,「家族の形成と再編」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その２　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 109-21.

小野寺理佳, 2012a,「アイヌとジェンダー」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その２　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 61-93.

――――, 2012b,「アイヌ社会における和人のアイヌ性――和人妻と和人夫」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その２　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 123-42.

（菊地　千夏）